氏　　名　川村文重（かわむらふみえ）
学位(専攻分野)　博　士（人間・環境学）
学位記番号　人博第408号
学位授与の日付　平成20年3月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目　ディドロにおける科学的認識論、思考、テクストの内的連関
——『ダランベールの夢』の事物の多層的な象徴性を通して——

論文調査委員　（主査）准教授　多賀　茂　教授　田邊玲子　教授　松田　清
准教授　増田　眞

論文内容の要旨

本学位申請論文は，『百科全書』の刊行などによって啓蒙思想を代表する，18世紀フランスの哲学者ドゥニ・ディドロの対話体による作品，『ダランベールの夢』の読解を軸にしながら，生命の発生や発酵などのテーマを巡って，当時における機械論的世界観と化学的世界観の対立を明らかにしようとしたものである。

ディドロは，生命を巡る問題で限界に行き当たっていたデカルト主義的機械論を乗り越えるため，その手だてを当時正統な学問としての地位を獲得しつつあった化学に求めた。実際ディドロは，反デカルト派の科学者ルエルの講義に出席し，また『百科全書』の「化学」における項目を同様の傾向を持つヴネルに任せている。『ダランベールの夢』という作品は，一見フィクションと哲学的言説が相半ばするきわめて独特の表現スタイルをとりながらも，そうした化学についての研究や考察から得られた知見に基づいて，当時としてはきわめて先鋭的な科学的・哲学的思想を語っているのである。

『ダランベールの夢』を構成する三つの対話のうち，第一の対話は著者ディドロと盟友ダランベールの対話という形式で進められる。本論文の第一部では，まずその第一の対話で語られる，当時名声を獲得していた彫刻家ファルコネによるピグマリオン像の粉砕実験について検討し，そこではまさにディドロの化学的唯物論の核心が述べられていると同時に，デカルト主義的機械論の批判が行われていることを明らかにする。粉砕された大理石が，やがて腐植土の中で分解され，植物に取り入れられ，さらには動物的生命へと変化する過程こそは，神という外部存在の助けを借りることなく自己形成していくという，ディドロの唯物論的自然観の基底なのである。

ただ，ディドロの文学的天才は，単なる化学的生命論の披露にはとどまっておらず，盟友ダランベール本人の身体さえも同様に粉砕し，デカルト主義者である彼の化学主義者への生まれ変わりを示唆するという大胆な言説をさえ挟んでいる。そして確かにダランベールは，第二の対話ではすでに化学的な思考の側に立って，夢を見ることになる。

しかし，その前にもう一つ重要な主題が第一の対話には挟まれている。たとえ生命の発生が化学によって説明されたとしても，それだけでは理性がどのように生じるかを説明することはできない。そこでディドロが取り出すのが，「感性を持ったクラヴサン」のモデルなのであり，本論文の第二部では，そのモデルがいかにして哲学者の思考そのもののアナロジーとして機能しているのかを見る。感覚を共鳴としてとらえ，感性を持った弦の振動を，クラヴサン自体が秩序立て，作品を生む。機械論に陥りがちな器楽論も，ディドロにおいては慎重に唯物論的・一元論的な思考装置の中に組み入れられている。彼にとっての理論モデルと見なされる，当時のフランス音楽界において新しい世代を代表していたラモーの和声論，とりわけその根音バスの理論こそが，そうした哲学者の思考のメカニズムのアナロジーそのものとして機能するのである。

本論文の第三部では，ディドロとの対話のあと自宅に戻ったダランベールが，夢うつつの中で語る様々なうわごとのうち，特に壷の中の世界についての言説に注目し，宇宙を発酵という化学的過程で説明し尽くすディドロの壮大な世界観を検討する。17世紀，デカルト主義的機械論に対抗すべく，錬金術の系譜を引いて登場した医化学の思考と同じように，化学の実験

と宇宙が同位相で語られるアナロジー的思考がディドロの唯物論の根底にある。発酵という概念装置は，当時の科学的・哲学的文脈においても，まさに世界の生成や生命の活動についての思考を激変させる可能性を秘めていたのである。

このように，化学的認識論の立場から見れば，事物のイメージから読み敢れる多層的な象徴的意味の連なりから，ディドロの思考とその思考が現れる様を描くテクストとの間には，その深層レベルで切り離しがたい内的連関が存在していることを見いだすことができる。彫刻家による作品，盟友ダランベールの身体，感性を持ったクラヴサン，壷の中の生命など，ディドロの作品に現れるイメージは多様であるが，それらは同時にこの哲学者のアナロジー的思考の類い希な強靱さによって貫かれている。ディドロのテクストを解釈することは，事物の付帯概念の発する小さなざわめきを聞き取り，アナロジーを構成してテクストの流れを捉えることなのであり，テクストの表層部分の背後に聞き取れる倍音を捉え，その倍音の動きに基づいて旋律を作り上げる「哲学者―クラヴサン」の音楽と同じ作業を行うことである。また，それは，序章で指摘したように，ディドロの作品世界を構築する「ヒエログリフ」を解読しつつ，そこに現れている「ポリープ」的な諸概念の連結を把握することでもあるだろう。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本学位申請論文は，『百科全書』の刊行などによって啓蒙思想を代表する，18世紀フランスの哲学者ドゥニ・ディドロの対話体による作品，『ダランベールの夢』の読解を軸にしながら，生命の発生や発酵などのテーマを巡って，当時における機械論的世界観と化学的世界観の対立を明らかにしようとしたものである。

18世紀のフランスは，『法の精神』のモンテスキューや『社会契約論』，『エミール』，『告白』などのルソー，あるいはサドなど，きわめて多様で驚くべき思考の自由さに溢れた作家を輩出した。そのなかでも，本論文が取り上げているディドロは，強靱な思考の一貫性と比類なき文学的表現の自由さをあわせ持つ，他に例を見ない才能の持ち主である。本論文は，そうしたディドロの一著作『ダランベールの夢』が含意することを詳細に明らかにすべく，その背景として存在する同時代の化学から音楽にいたる広範囲な知の基盤を探求した論考であると同時に，文学者としてのディドロの魅力さえも浮き彫りにした優れた論文である。したがって本論文の最大の特質は，テクストの詳細な読みと同時代の知のあり方に関する該博な検討とが共存しつつ，あい補い合っていることであろう。以下，こうしたテクスト分析と知的コンテクスト分析の相補的関係を中心に，審査結果を報告しておきたい。

本論文の第一部では，まずディドロと知己のあった彫刻家ファルコネが制作したピグマリオン像を粉砕する実験について検討されるが，そこではまさにディドロの化学的唯物論の核心とも言える部分が明らかになっていると同時に，デカルト主義的機械論の批判が行われていると申請者は主張する。粉砕された大理石が，やがて腐植土の中で分解され，生物に取り入れられ，生命へと変化する過程こそは，神という外部存在の助けを借りることなく自己形成していくディドロの唯物論的自然観の基底なのである。ただディドロは，ピグマリオン像によって人間による生命創造を主題とする古代神話を背景として用いる一方で，盟友ダランベール本人の身体を同様に粉砕するかのような言説を挟むことによって，彼の化学主義者への生まれ変わりをも示唆している。申請者のこの着眼は，フランスにおいてもこれまで指摘されたことのないものであり，きわめて学術的に興味深い着眼であると言えるだろう。

一方，理性がどのように生じるかを説明するために，ディドロは「感性を持ったクラヴサン」というモデルを提出している。本論文の第二部では，感性を持った弦の振動を，クラヴサン自体が秩序立て，作品を生むという器楽論が，哲学者の思考そのもののアナロジーとして機能していることが検討され，ディドロにおいて，いかに慎重に唯物論的・一元論的な思考装置が組み立てられているかが明らかにされている。さらに申請者は，ディドロにとっての音楽上の理論モデルと見なされるラモーの和声論を詳細に考察し，とりわけその根音バスの理論こそが，そうした哲学者の思考のメカニズムのアナロジーの基盤にあると主張する。全体と部分の間や，あるいは異なった領域や水準の間に現れる類似関係としての「アナロジー」が，二元論を越えるためのディドロの唯物論的方法論そのものなのである。こうした盤石の論考は，申請者の研究者としての資質を明確に証処づけていると言えるだろう。

また『ダランベールの夢』の第二の対話は，ディドロとの対話のあと自宅に戻ったダランベールが，夢うつつの中で語るうわごとをレスピナス嬢が書き取り，医師ボルドゥに報告するという形式のもと，ディドロの化学的世界観が徹底的に展開

されている。本論文の第三部では，そのうち特に「壷の中の世界」についての言説の分析から出発して，宇宙を発酵という化学的過程で説明し尽くすディドロの壮大な世界観が検討される。申請者はその世界観を，デカルト主義的機械論に対抗すべく錬金術の系譜を引いて登場した医化学の思考と比較しながら，化学の実験と宇宙の生成が同位相で語られるアナロジー的思考がディドロの唯物論の根底にある証拠として提示し，さらに同時代において，「発酵」という概念が化学の領域においてどのように議論されていたかを詳細に跡づけている。ここでも申請者の分析の詳細さと知識の該博さとが明らかになっていると言えるだろう。

本論文は，18世紀のフランスという文学・哲学史上きわめて重要な時期に現れたディドロという才能の多面性と強靱さを浮き彫りにしつつ，この作家を取り囲む同時代の知の全体的方向性や，さらにはこの作家の作品が持つ現代的意義までも明らかにしたものであり，文化・地域環境学専攻の理念にふさわしい内容を備えたものといえる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値のあるものと認める。また平成20年３月３日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。